

横山ゆずり作 「ジョークで済むわけ？」

< 前編 >

(効果音) (教室のガヤ)

西山頼子 それでは次に、バスの中での席順を決めたいと思います。決め方は何がいいですか？

女子 班ごとでいいんじゃない？

男子 好きなやつ同士だよな、やっぱ。

頼子 それじゃ決まらないでしょ？

女子 じゃ、クジ引きは？

男子 冗談じゃねえよ。クジなんて。

(効果音) (ガヤ)

頼子 ちょっと、静かにして！ 意見のある人は手を上げて言ってください。

女子 はーい。クジで決めたらいいと思います。一番公平だし。

頼子 ほかに意見はありませんか？ なければクジにします。

それじゃ今から紙を配りますから、1枚ずつ取って、その番号の…。(F O)

女子A キャー！ 隣、隣。

女子B ラッキー！ やったね。

女子C えー、ウッソー！ やっだあ、あたし、先生の隣じゃん。サイテー。

武藤^{たかひと}高人 ゲェ、冗談じゃねえよ。なんでおれが、あんなブスの隣なんだよ。おい、だれか替われよ。

生徒 (口々に)「ヤだよ」「ちょっと、ずるいわよ」「わたしもだれか替わって」

頼子 静かにして。みんな、自分の席。分かりましたかぁ。

(効果音) (ガヤ、収まらない)

頼子 ちょっと、みんなぁ！ ンもう。(本で机をピシッとたたいて)うるせえ！ てめえら、静かにしろ！

(効果音) (シーンとなる)

頼子 (ピシリと)とにかく、一度決まった席は変えないでください。じゃ、これで学活を終わります。

(効果音) (ガヤ戻る)

頼子モノローグ あーあ、全く、なんてうるさいクラスなんだろ。

頼子ナレーション わたし、西山頼子。この超にぎやかな学級、青春中学2年A組の学級委員長。うちのクラス、それでも“学年一 騒がしい”って評判なのに、今日は特にひどいの。楽しみにしてた、山中湖の移動教室がもうすぐだから、まあ無理もないけど。

神谷愛子 西、お疲れさん。学級委員長もラクじゃないね。

頼子 あ、愛ちゃん。まあね、慣れたつもりだけど、でも今日はダメ。もう、のどカラカラ。

愛子 山中湖行ったら、もっとすごいよ、きっと。

頼子 ヤだ、脅かさないでよお、愛ちゃん。

(効果音) (終業のチャイム)

高人 おい、ゲーセン行こうぜ。

男子 おう。武藤^{もと}ちゃん、駅前の店、新しいゲームの機械、入ったらしいぜ。

頼子 ちょっと、武藤君たち。どこ行くの？ 授業始まるわよ。

高人 うるっせえな。お前には関係ねえよ。おい、行くぞ。

ナレーション 何かと問題の多いクラスの中でも、一番目立っちゃってるのが、この武藤高人。何しろケンカはするは、授業はフケるは、先生に楯突くはで、はっきり言って“不良のかがみ”。委員長としては、頭の痛いところなのです。

頼子 ったく。あの不良、なんとかしてほしいよ、あの性格。武藤がいなかったら、もうちょっとはマシなクラスになるんだけどなあ。

愛子 怒らない、怒らない。武藤君はああいう人なんだからさ。それに、人間の性格なんて、そんな急に変わるもんじゃないって。

ナレーション 親友の、“愛ちゃん”こと神谷愛子は、いつもこんな風に、悟ったようなことを言う。おとなしくて目立たないんだけど、そのおっとりした口調には、こっちがカッコしてるのがバカらしく思えてくるような説得力が、妙にあったりして。愛ちゃんはクリスチャンだそう。わたしも何度が教会に誘われたことがある。まだ行ってはいないけど。とにかく、何かと頼りになる友達、かな。

(音楽) (楽しそうな感じ)

ナレーション いよいよ待ちに待った、山中湖移動教室。でも、問題児クラスの委員長としては、不安半分ってところ。です。

(効果音) (バスの中。ガヤ。笑い声。)

高人 (以後、小声で)シー！ 静かにやれよ。起こさないようにな。

男子 (クスクス笑い)しかし、よく寝てるぜ、こいつ。

高人 よし。まずはヒゲね。おーっとうと。次はアイシャドー。

男子 ヒッヒ。武藤ちゃん。入れ墨もサービスしてやろうぜ。

高人 そうだな。そして最後の仕上げは口紅ですよー。

女子 ヤだ。あんたたち、何やってんの？

男子 シー！ 靖があんまりよくお休みなんで、メイクアップしてやってんですよ。

女子 ヒドーい。マジックで顔中書いちゃって。信じらんない。

高人 バカ、シー！

本間靖 (大あくび)(半分寝ぼけながら)なあに？ どうかしたの？

高人 ほら見ろ。起きちゃったじゃねえかよ。

周りの生徒 (クスクス笑う)

靖 ねえみんな、どうしたの？ 僕の顔に、なんか付いてる？

高人 (必至に笑いをこらえながら) べ、別に。付いているのはただ目と、鼻と、口と、
...ヒ、ヒ、ヒゲ...(こらえきれず吹き出す)

周りの生徒 (つられて爆笑)

頼子 ちょっと、後ろのほう、何盛り上がってんの？ バスの中ではリクリエーション
係の指示に従うことになってるんだから、協力してくれなきゃ困...(ギョッと
して)本間君、何、その顔？

靖 え？ な、なんで？

頼子 これ、ほら、鏡見てみなよ。

靖 え、ゲー、なんだこれ？ ひ、ひどいなあ。だれだよあ。(泣きそうになる)

高人 (しらばっくれて)知らねえよなあ。

頼子 武藤君たち、なんてことすんのよ。ふざけんのもいい加減にしろさいよ。

高人 (一向に気にせず)(大笑い)こいつ、泣いてやんの。靖、泣くなって。

頼子 武藤君！

高人 ギャーギャー言うなよ。ジョークだよ、ジョーク。そんなマジになるなって。ったく。
ユーモアが分かんないやつは困るよな。

頼子 何がユーモアよ。大体ね、...

先生 おーい、そこ、何騒いでるんだ？ 西山、どうした？

頼子 先生、あの...。

高人 (さえぎって)な、なんでもないです。本間が、ちょっと気分悪くたっただけ。

愛子 なんだったの、後ろのほう？

頼子 またあいつよ。武藤のバカ。あーあ、行きのバスの中から、もうこれだもん。先
が思いやられる。何事もなきゃいいけど。ヤな予感、してきたなあ。

愛子 心配したってしょうがないって。西、大丈夫だよ。あたし、“この移動教室が無
事に終わりますように”、ってお祈りしてるから。

愛子 へえー、何？ そんなこともお祈りしちゃうわけ？

愛子 そうだよ。だから心配ないって。

女子 (ガヤ)

ナレーション そして1日目の夜。

女子A だれが先にかける？

女子B あたし？ キャー、出たらどうしよう。

女子A どうしようって、出たらしゃべるに決まってるでしょ。

女子B あー、ドキドキするう。

(効果音) (電話のダイヤル音。呼び出し音)

頼子 何やってんの、二人で？
(効果音) (慌てて電話を切る)
女子A な、なんでもないよ。
頼子 あれ？ 電話かけてたんじゃないの？
女子B う、うん、家にね。でもやっぱりいいの。委員長こそどうしたの？
頼子 あたし？ 今、反省会終わったとこ。あ、何それ？ 月刊「ギャル」5月号？ ちょっと見せて。「テレホンデートコーナー。電話ですてきなボーイズとデートしませんか？ 19歳 大学生。同い年のスポーツ好きの女の子希望。電話、042...。」何これ？
女子A あーあ、委員長にバレちゃった。内緒にしといてよ。あのさ、西、知らない？ 今はやってんの。テレフォンデート。この本に載ってる子のとこに、電話しちゃうの。ほら、これ見てよ。「坂上雅之。27歳。会社員。今ここにかけようとしてたんだよね。
頼子 ふーん。でもこれ、「女子大生希望」って書いてあるよ。
女子B だからさ、こっちも中学生だってバレないようにすんの。こんなの、遊びだもん。
女子A そ、単なるジョークよ。大体、27歳のくせに、こんな本に載るやつなんて、どうせイモだし。
女子B 声もさ、大人っぽく「もしもし」とか言っちゃってさ。
頼子 ヘー。平気なの、そんなことして？
女子A 平気 平気。そいでさ、話が合って、面白そうな人だったら、会ってみたりするし、そんでカッコよかったら、付き合っちゃう。ゲソだったら、シカト。
女子B そ、そ。話してて、相手がだんだんマジになってきてさ、“ヤバいな”と思ったら、電話切っちゃえばいいし、こっちの番号だって、デタラメ教えちゃうもんね。
女子A ま、はっきり言って、暇つぶしだよ。でもさ、結構スリルあるし、面白いよね。
女子B うん。でも自分の家からじゃかけにくいからね。
女子A そ。今夜がチャンスってわけ。
頼子 ふーん。でも、だまされた男の子は、悲惨じゃない？
女子A だって、どうせあっちだって遊びじゃないの。
女子B そ、ジョーク ジョーク。
先生 おい、そこ、何やってんだ？ 消灯時間だぞ。
女子 (口々に)「はーい」「すみません」
ナレーション (ため息)なんか、すごいこと聞いてしまった。それにしても、あの子たち、罪悪感なんて全然ないみたい。なんか怖いなあ。
部屋に戻ると、もう電気は消えていた。
頼子 愛ちゃん、寝ちゃった？

愛子 (小声で祈っている)...アーメン。お帰り、西。遅かったね。
頼子 なんだ、起きてたのか。何か、寝言みたいなの言ってんだもん。
愛子 ああ。寝る前のお祈りしてたんだ。
頼子 へえ。そうなんだ。(モノローグ) あーあ、あたしも、うちのクラスが、もう少しまともになるように願いたいよ。

愛子 なーに？
頼子 ううん、なんでもない。お休み。
ナレーション それから、わたしたちがやっとウトウトし始めたころ、突然、宿舎全体に、非常ベルが鳴り響いた。

(効果音) (非常ベル)(ガヤ)

< 後編 >

ナレーション 山中湖の移動教室 1 日目の夜、わたしたちは、ものすごい非常ベルの音で、目を覚ました。

(効果音) (ガヤ)
先生 静かに。みんな、部屋へ戻りなさい。今、先生方で事情を調べているが、火災などではないから、安心して各自休むように。

(効果音) (朝。小鳥の声。ラジオ体操の音楽)
女子 A ねえ ねえ。ゆうべのあれ、聞いた？
女子 B 知らない。
女子 A 非常ベル押しちゃったの、うちのクラスの本間君だって。
女子 B えー！ あのおとなしい本間靖が、なんで？
女子 A それがさ、傑作なの。夜中にね、本間君が眠っているところに、また武藤君たちがいたずらしたらしいのよ。

女子 B 今度は何やったの？
女子 A うん。本間君さ、口開けて寝てたんだって。それで、その口の中にさ、ほら、あの臭い胃腸薬あるじゃない。

女子 B 正露丸？
女子 A そうそう。それをドバドバ入れちゃったんだって。
女子 B ゲゲー！ 悲惨。
女子 A で、本間君、いきなりガバッと起きたはいいけど、口は苦いは、寝ぼけてるはで、訳分かんなくて、廊下に飛び出して、非常ベル押しちゃったんだって。

頼子 それ、ほんと？
女子 A うん、確かよ。ゆうべ、武藤君たち、夜中まで怒られてたもん。学年主任なんか、「お前たちみたいなケーチーフハクなやつは、一晩中、外で、頭冷やしてる。」ってどなってたもん。“ケーチーフハク”って何？

頼子 頭が軽くて薄っぺらってこと。ほんと、どうしようもないね。A組の恥だよ、全く。
ナレーション 2日目は、富士登山がある日だった。途中までバスで行って、そのあと、3時間
くらいかけて登るのだ。結構ハードな行程だ。
高人 (かすかにオフで聞こえる)...だよ。...しろよ。...なよ！
靖 (＃)でも、...だもん、...いいよ。
高人 (＃)バカ、お前、...でもいいのかよ。
頼子 愛ちゃん。武藤のやつ、また本間君にチョッカイ出してる。ゆうべのことで、ま
だ懲りないのかねえ。
愛子 ふーん。
頼子 もう黙ってらんない。あたし、ちょっとやめさせてくる。
愛子 待って、西。
頼子 止めたって行くわよ。
愛子 ちょっと、落ち着いてってば。よく見てみなよ。本当に、いじめてるのかなぁ。
頼子 え？
靖 (オン)ダメだよ。もう歩けない。いいよ、僕、休ましてもらうから。みんな、先 行
ってよ。
高人 バカ野郎。もうダウンかよ。情けねえやつだなぁ。いいか、お前、ここまで来て
な、富士山登んなくてどうすんだよ、え？ 一生後悔するぜ。
靖 いいよ もう。武藤ちゃんたち、先 行ってよ。
高人 そうはいくかよ、このボケ。もっと上まで行くと、雲が下に見えるんだぞ。空気
だって違うしな、最高なんだぜ。
靖 ほんと？
高人 そうだよ。それでもお前が「見たくねえ」つうんだったら、この辺で、ぶっ倒れて
たっていいんだぜ。おれらだけで行くからよ。
靖 ま、待ってよ。僕も行くよ。
高人 ほら ほら、しっかり足踏ん張らないと、コケるぜ。
頼子 武藤君、あれでも一応励ましてるつもりなんだ。
愛子 ね、そうでしょ？ 言い方は乱暴だけど、なんだかんだ言っても、本間君のこと、
かばってんのよねえ。
頼子 へー、驚いた。あいつがね。でも愛ちゃん、よく気がついたね。
愛子 まあね。前からね、武藤君って、根っからのワルじゃないような気がしてたの
よ。
ナレーション その時、わたしは、愛ちゃんや武藤君が、自分よりちょっと偉く思えた。委員
長ぶって、実はみんなのこと、あんまり見ていなかった自分が恥ずかしかった。
(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 移動教室が終わってから、わたしは、何か心の中にしっかりと残っているものを感じていた。それから間もないある日――。

先生 今日の国語の時間は、作文の勉強だ。この間、君たちを書いてもらった“移動教室の思い出”の中の、何人かのをプリントにしてきた。これを参考に使って、正しい作文の書き方を覚えてほしい。ではまず、それぞれ詠んでもらおうかな。本間、自分のを読みなさい。

靖 はい。「僕わ最初、移動教室の目標とかが、よく分からなかった。1 日目のバスの中で、顔にいたずら書きをされた時わ、本当に恥ずかしかった。帰りたと思った。その日の夜わ、大変な事件を起こしてしまった。僕が先に寝ていて、僕の口にだれかが薬を入れて、苦くて、苦しくて、気がついたら、ベルが鳴って、先生やみんなが集まってきた。(F O)」

ナレーション 靖君の作文は、いつになく生き生きしていた。聞いているわたしたちの心も、いつの間にか山中湖に戻っていた。

靖 「2 日目の登山わ、一番思い出に残っている。前の日のことで、あまり寝ていなくて、少しフラフラして、何度もあきらめようと思ったけれど、その時、いつも武藤君たちが一緒に怒ってくれたり、ほかの人が荷物を持ってくれたので、みんなと一緒に上まで登れた。頂上からの眺めわ最高だった。そのドキッとするほどの美しさわ、いつまでも忘れないだろう。僕わ、山中に行って、いろんな所を歩いたり見ただけじゃなく、今までと違う人と友達になれたのがうれしかった。終わり。」

ナレーション わたしは心の中で、思わず拍手した。たどたどしい文だけど、靖君の気持ちが、すごくよく伝わってきたからだ。ところが、本間君が読み終わると、先生はこう言ったのだ。

先生 よし、座っていいぞ。ではこれから、今の本間の文章の間違いを、みんなで直してみよう。まず、一番最初は、原稿用紙 1 マス空ける。それから、「僕わ」の「わ」は、「わ」じゃなくて「は」だ。こりゃ小学校 1 年の国語だぞ。それから...(F O)

ナレーション わたしは、あ然とした。愛ちゃんや何人かの友達も、困ったような、怒ったような顔をしている。本間君は、決まり悪そうに小さくなって座っていた。武藤君は、机にうつぶしたまま、先生だけがとくとくとしゃべっているようで、なんだか白々しい 1 時間が過ぎた。その日の帰り道――。

愛子 あ、きれい。こんなとこにツツジが咲いてたっけ。

頼子 ほんとだ。何回も通ってる道なのに、気がつかなかった。あ、この葉っぱ、虫食ってる。(むしる)

愛子 あ、これも。あ、またあった。

頼子 あ、そうか。

愛子 どうしたの、急に？

頼子 え？ うん、あのね、今、ふと思ったんだけど、木の葉っぱなんて、虫が付いたりすると、すぐ傷むじゃない。だから、すぐ分かって便利だなと思って。(少し考えて)人間もそうだったら、簡単に見分けがついていいのにな、と思ったの。

愛子 どういう意味？

頼子 人間の場合はさ、優しくな顔して、意地悪なのがいったり、逆に、根はいいやつなのに、誤解されたりっていうのが多いからさ。例えば、教師のくせして、偉そうなこと言って、生徒を傷つけたりとかさ。

愛子 ああ、今日の本間君のこと？

頼子 うん。思い出してもムカついてくる。あんなのないよ。でも、それだけじゃなくてさ、人間って、一人一人、どんな人なのか、いいやつか悪いやつか、なかなか分かんなくて、面倒だってこと。あたし、なんか、委員長やってく自信、なくなっちゃった。

愛子 西、あのさ。人間なんて、しょせん、“あの人はいい人、この人はダメ”なんて決められるもんじゃないでしょ。一人の中にいろんな面があるんだから。

頼子 そりゃそうだけどさ。

愛子 だから、いい人だけと付き合おうって思っても、それはムリよ。

頼子 じゃ、どうしたらいいのよ。

愛子 うん、あたしも、よく分かんないけど、結局は、その人のいいところも、欠点も、全部ひっくるめて、認めていくしかないんじゃない？ そうじゃないとさ、いつまでも、上っ面だけの、薄っぺらな軽い付き合いのままだと思う。

頼子 言われてみれば、うちのクラスなんて、ほんと、そうだよ。にぎやかで、楽しそうで、一見、仲よさそうだけど、実はみんな、自分の姿を隠してるって感じ。何かというと、すぐ「ジョーク ジョーク」だもんね。

愛子 みんな、本当はさ、本音を出したいんだと思う。でも、それをさらけ出した時、受け入れてもらえなかったら、つらいじゃない。今日の本間君みたいに。だから、傷つくのが怖くて、適当なところで笑ってごまかしてんだと思う。

頼子 そうかもしれない。でも愛ちゃん、なんでそんなこと分かるの？ すごいよ。あたしなんて、クラスのこと、そんな風に考えたことなかった。

愛子 うん。わたしも、前は自分の性格のことで結構悩んだりしたから。でも教会に行くと、神様のことを知ってからかな、変わったのよ。“自分で、どうしてもやだなんて思っている性格でも、神様は愛してくださっているんだ”ってことを知った時、“わたしもほかの人たちを受け入れなくちゃ”って思ったの。だって神様は、すべての人を、いいところも弱いところも含めて、愛してくださる方だから。“わたしも、友達と、本音の部分で付き合いたいな”ってね。

ナレーション 神様のことを愛ちゃんから聞くのは、これで 2、3 回目だけど、普段おとなしい

彼女が、やけに確信を持って話すのに、ついついわたしも引き込まれていった。
“やっぱ、クラスよりも先に、まず自分自身を見つめることから始めなくちゃ。”
そう考えたら、ふと、“神様信じて愛ちゃんが変わったんなら、もしかしたらわた
しも”って、その時、妙に実感的に思えてきたのだった。

< 完 >